

## 回想 慶應義塾

鳥居泰彦著（慶應義塾大学出版会・6090円）

福澤諭吉の手で開かれた慶應義塾は、今年で155年の歴史を刻む国内屈指の学塾である。1993年から2001年までの8年間、塾長として、早稻田と並び立つ私学のかじ取りを任された著者が、日本の近代史に沿った慶應義塾の歩み、小泉信三をはじめとする歴代塾長の先導の歴史を、本書で丹念にひもといた。

1917（大正6）年に生まれた大学医学科に先立つこと40年余、福澤が東京・三田に創設した慶應義塾医学所にはじまり、近年では、グローバル化の潮流を先取りした湘南藤沢キャンパス（SFC）の開設にいたるまで、福澤の「自我作古」（自ら歴史の先を行き、歴史を作れ）の思想は変わらず受け継がれているようだ。

『時事新報』を創刊した福澤は、塾運営の傍ら、亡くなるまで19年間にほぼ毎日、計約5000本の社説を執筆し、欧米列強にたいじ対峙しつつ近代国家を建設する日本の行く末を案じ、論じ続けたという。いかなる政治制度、体制を採るかをめぐり、英米流を主張した福澤と明治の元勲、伊藤博文の確執はとりわけ興味深い。巻末には「かけがえのない相談相手」橋本龍太郎元首相ら、塾出身の物故者への思いが記されている。（井）

毎日新聞

2013年6月2日